



今月のことば 令和8年(2026) 1月 <No.233>

## 連続無窮(れんぞくむぐう)



香川県のある病院の相談室では、認知症の当事者が、新たに診断を受けた方の相談に乗る試みが続けられています。

長年役場に勤めた高橋さん(65歳)はアルツハイマー病と診断され、それまでの自分を見失いそうな苦悩の中にありました。しかし、同じ病を抱えながら相談員として活動する「先輩」、渡辺さん(74歳)の言葉に触れ、少しずつ現実を受け入れ始めます。

「認知症になってよかったこと。妻のやさしさにふれたこと。人の痛みがわかったこと。」  
「まさに、気持ちの持ち方ひとつで、どうにでもなるものです。…あれほどおちこんだ私でしたが、認知症の前も後も、何も変わらないことに気づきました。」

『NHKスペシャル 認知症の先輩が教えてくれたこと』2021年9月放送 より

高橋さんの心を動かしたのは、専門家の助言以上に、同じ痛みを抱える者同士だからこそ響き合う、「先輩」の姿や言葉でした。私たちはつい、「救う側」と「救われる側」を分けがちですが、**本当の救いとは、共に迷い・共に涙を流す関係の中にこそある**のではないのでしょうか。



考えてみれば、お念仏の教えが途絶えることなく伝わってきたのも、決して悩みのない清らかな人によってではありませんでした。むしろ、死ぬまで煩惱を抱えた凡夫(ぼんぷ)であり、思い通りにいかない人生に立ちすくむ人々が、「私もあなたと同じように苦しい。けれど、その私を捨てない阿弥陀さまがいらっしゃる」と、痛みを通して手を取り合ってきた歩みだったはずです。

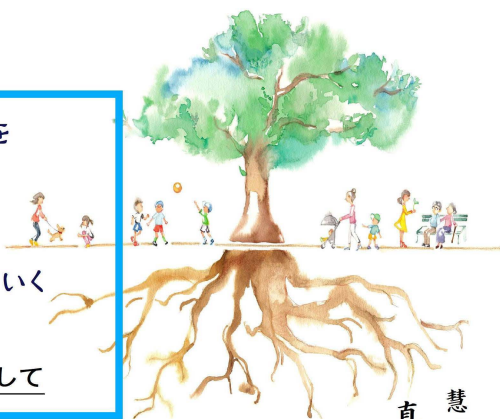
**喜びのご縁も大切ですが、むしろ苦しみや悲しみへの共感こそが、お念仏のバトンを次の一人、また次の一人へと繋いできたのです。**

親鸞聖人はその様子を、次のように喜ばれました。

先に生まれる者は後を導き、後に生まれる者は先をたずねていき、果てしなく連なって(連続無窮)、途切れることのないことを願う。

それは、数限りない迷いの人々が、残らず救われていくためである。

『教行信証 後序』道綽禅師のことばを引用して



「痛みを知るからこそ寄り添える」という姿。それは、八百年以上も前から連綿と続いてきた、お念仏の「連続無窮(れんぞくむぐう)」の姿そのもののなのです。

慧  
日  
山  
真  
光  
寺